

北陸銀行新潟支店における吉田鉄郎の設計プロセス

1950 年代前半の書簡・スケッチ等関連資料の分析を通して その 1

Tetsuro Yoshida's design process in the Niigata Branch of the Hokuriku Bank

Through analysis of related items such as letters and sketches from the early 1950s Part 1

○高木愛子¹, 田所辰之助², 大川三雄²*Aiko Takagi¹, Shinnosuke Tadokoro², Mitsuo Ohkawa²

The Niigata Branch of the Hokuriku Bank is an architecture designed by Tetsuro Yoshida in his later years. By analyzing four items from collection of NTT FACILITIES, INC., it was shown that: Due to correspondence with Torakichi Sawa, who was a support of Yoshida's designs, Yoshida was able to communicate many ideas while his condition was still good, and the early design for the Bank were similar in the thinking to that of Osaka Central Post Office.

1. はじめに

吉田鉄郎は、日本のモダニズム建築を牽引した通信省官繕課を代表する建築家の一人である。特に、東京中央郵便局と大阪中央郵便局は、鉄筋コンクリート造の柱梁構造をそのまま立面に表し日本の真壁を表現した、日本の初期モダニズム建築の傑作として知られる。戦時中に通信省を辞してからの吉田の業績としては、『日本の建築』^[1]をはじめとした執筆活動が有名であるが、設計活動においても、北陸銀行の新潟支店、長野支店、代々木寮、福井片町支店などを手掛けている。

中でも新潟支店は「大阪中央郵便局と同じ系列のもので（略）より一層徹底して追及されている」^[2]と評価される一方で、吉田の初期の作品である京都中央電話局を彷彿とさせるタイルによる装飾的表現や、階段室の曲梁の大胆な表現などに異なる意図が感じられる。

吉田鉄郎研究は数多くなされているものの、北陸銀行を取り上げた研究は行われていない。一方で、吉田は 1949 年に脳腫瘍を発病したため、通信省において部

下であった沢寅吉氏が現場に入り、北陸銀行の設計をサポートした。結果として、吉田と沢の間で交わされた書簡やスケッチ、訂正指示が書き込まれた図面など、吉田の設計に関する考え方やその手法を窺い知ることのできる貴重な資料が残されている。

本稿では、NTT ファシティーズが所蔵するこれら北陸銀行に関する建築資料の中から、吉田が 2 度目の手術を受ける 1950 年 10 月前までの新潟支店に関する 4 点の資料の分析を行い、初期の計画案についての考察を行った。

2. 調査対象資料

調査対象は、矢作英雄氏が恩師である吉田鉄郎から譲り受けた資料および自身が吉田鉄郎研究のために収集・作成した資料等で構成された資料群で、矢作氏から NTT ファシリティーズへ寄贈されたものである。

① 北陸銀行新潟支店スケッチ①【18062】^[3]

本資料は、6 点の書簡と 2 枚の図面、26 枚のスケッチが簡易製本された資料である。

② 北陸銀行新潟支店（スケッチ②【18058】

本資料は、1 枚の図面と 20 枚のスケッチが簡易製本された資料である。

③ 北陸銀行新潟支店スケッチ③【18063】

本資料は、5 点の書簡と 4 枚のメモ、29 枚のスケッチが簡易製本された資料である。

④ 北陸銀行新潟支店新築図面（青図）【18061】

本資料は、1950 年 5 月 20 日付けの青図 7 枚と、同年 6 月 30 日付けの青焼き図面 6 枚である。

3. 分析

3 冊のスケッチ資料の綴られ方は、資料①の前半と

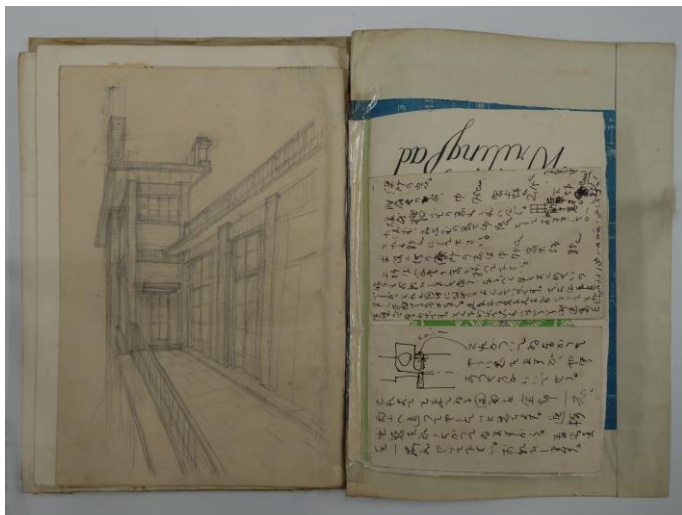


図 1 資料① 1 ページ目 書簡と最初期スケッチ

1 : 日大理工・研究員・建築 2 : 日大理工・教員・建築

表 1 北陸銀行新潟支店の初期建築資料にみる設計過程

#	資料	日付	概要	特記事項	区分
1	①	未詳	最初期のスケッチ群	大阪中央郵便局に通じるデザイン案あり。	初期案
2	①	未詳	初期の敷地条件	既存の 2 つの土蔵はそのまま残すことが条件。	
3	①	1950年3月7日	敷地条件の変更	土蔵は一つ取壊し、一つ移動することに変更。	
4	①	未詳	柱割の検討スケッチ	実施案より 1 スパン少ない。	
5	②	未詳	配置図・各階平面図	最初期のプラン。フリーハンドで修正。	詳細検討
6	①	未詳	附属舎を中心としたスケッチ群	#5のフリーハンド修正プランの検討。	
7	②	未詳	詳細検討スケッチ群	玄関廻り・営業室・立面の検討が多数。	
8	②	1950年5月4日	中庭のスケッチ 等	石の配置を詳細に指示。	
9	③	1950年5月14日	各種詳細スケッチ群	建具や電燈のデザインまで描き込まれている。	訂正
10	④	1950年5月20日	沢の製図による図面（青図）	多くの修正が書き込まれている。	
11	③	1950年6月上旬	変更提案の手紙（吉田⇒沢）	沢の住所が東京となっている。	
12	③	1950年6月13日	吉田宅での図面修正を依頼（吉田⇒沢）等	何回か直接打ち合わせが行われていた模様。	
13	④	1950年6月30日	沢の製図による図面（青焼き）	階段室廻りの図面のみ。	

資料③は作成時期ごと、資料②は記載対象ごとに纏められている傾向が見られた。そこで資料④も含め、記載された内容から可能な限り時系列での並び替えを試み、設計過程の概要を表 1 に示した。日付未詳の資料については順序が若干前後する可能性があるが、全体の傾向としては大きく 3 つの区分に分けられる。

(1) 窓

最初期のスケッチでは、柱間全てをガラス窓にする計画が描かれていた。しかし#1の後方のスケッチでは、既に小壁がついたスケッチが現れている。この小壁はシャッターを収めるために設けられた^[2]といわれている。また、階段室の立面も当初は柱間全てをガラス煉瓦とする計画であった。この案は比較的長い間残っていたが、#13の時点でガラス煉瓦の幅が狭まり小壁がつけられた。その経緯は不明であるが、階段室の 1 階出入口の幅に合わせたように見受けられる。

(2) 附属舎

宿直室や湯沸室、便所などが設けられた附属舎は、#5の時点では中廊下式であったが、同じ図面上に吉田のフリーハンドで片廊下式のプランが描かれている。バックヤードとも言える部分であるが、検討スケッチの枚数はメインである正面玄関や営業室の数を超える。竣工時に新潟支店長が「裏の方なんてホテルのようだ」^[4]と喜んだといわれる。また、附属舎を片廊下式にしたことにより、直接中庭に出られるようになった。吉田は#8のスケッチで睡蓮池周辺や附属舎からのアプローチの敷石の配置などを詳細に指示しており、中庭へのこだわりが窺える。

(3) タイル割

吉田作品の特徴の一つであるタイル割についても、吉田の緻密な検討が随所に見受けられた。特にタイルが張られた立面のスケッチには、細かい寸法の代わり

にタイル枚数が記載されている部分などがある。一方、新潟支店の外観の特徴であるタイルによる装飾的表現は、最初期の案では梁部分のみに留められていた。しかし、検討を重ねるごとに帯状のデザインが強調されていくことが確認できた。

4. まとめ

今回の新潟支店の 1950 年前半の建築資料の分析を通して、吉田が最初期には大阪中央郵便局に通ずる、装飾性を最低限に抑えたタイル割や柱間全てを窓とするデザインも考えていたこと、しかしそれは早い段階で変更されたことが明らかとなった。また、大量の詳細スケッチや東京での直接の打ち合わせ等、吉田が新潟支店の設計に主体的に関わることができていた様子が窺われた。1950 年前半は、まだ日本大学でも教鞭を執っていた時期でもあり、新潟支店は吉田にとって比較的思い通りにできた作品であったといえる。

一方でこの時期の資料には沢との書簡は残されておらず、大阪中央郵便局とは異なる表現に至った真意等について、言葉では記されていなかった。1950 年 10 月以降の資料の中には、書簡資料も多く残されており、さらなる分析が必要である。

<謝辞>

本研究では、株式会社 NTT ファシリティーズにて長期間にわたり資料調査を実施し、多大なるご協力をいただきました。同社堀田渡氏と吉岡康浩氏並びに郵政建築研究所観音克平氏に、深く御礼申し上げます。

<註・引用・参考文献>

[1] 吉田鉄郎『日本の建築』チュービンゲン、ワスマート社、1952。
 [2] 薬師寺厚「解説—作品とその変遷」『吉田鉄郎建築作品集』東海大学出版会、1968.05.10、p.14。
 [3] NTT ファシリティーズにおける資料番号。以降同じ。
 [4] 向井寛・内田祥哉編『建築家・吉田鉄郎の手紙』鹿島出版会、1977.9.10、p.146。